

中野北遺跡

—正受寺本堂建替えに伴う発掘調査報告 (NNN2014-1)—

2017.11.30 富田林市教育委員会

1 今回の調査と調査地について (図1・2)

今回の調査は、中野町二丁目に在る真宗大谷派正受寺の本堂建替え工事に先立つ発掘調査である。平成26年5月19日に事前調査（トレンチ1・2）を行い、中近世の遺構と遺物を確認した。この結果を受け、建物基礎工事範囲について平成26年6月16日～7月31日まで本調査を行うこととなった。

調査地は石川による中位段丘の東縁部に位置し、西側は谷によって下がり、東側の段丘崖との間に舌状地形となる。この舌状地形については「城ヶ跡」・「城ヶ西」などの小字名が残り、楠木正成によって築城された「中野古城」とする説もある。

正受寺の開基については諸説あり、宝曆6年(1756)・明和2年(1765)・明和年間(1764～1772)などと記載が異なる。一方で、本堂は明治に台風で倒壊したとされ、明治14年(1881)に出された再建願、明治24年(1891)の再建、などの文書が残る注1)。

2 基本層序 (図3、写真2)

既存建物解体に伴う盛土(図3-1層)の直下層(4・16層など)は解体時の削平を大きく受けしており、場所により旧地層が残存する高さが異なる。調査区西壁北側では盛土直下に灰黄褐色粘質土層(16層)、その直下は中世の瓦溜であるSK4埋土(19・20層)、地山(3層)となる。また、SK4の南端では16層の下に中世の包含層である灰黄褐色粘質土層(12層)、褐色粘質土層(13層)、地山と続く。調査は4・16層の上面で遺構検出を試みたが遺構検出が困難であったため、さらに掘り下げて地山直上で遺構検出を行った。地山面の高さは調査地西側でT.P.=55.1m、東側でT.P.=55.6mと約0.5m西側へ向けて下がる。

3 調査成果

1) 遺構 (図3～5、写真1)

遺構は複数時期を同一面で検出したため、全体平面図は出土遺物の年代を中心に、中世と近世で塗り分けた(図3)。近世の遺構は調査区全域に及ぶが、中世の遺構は調査地西半分に集中する。



図1 調査位置図



図2 調査区と事前調査トレンチ配置図

西壁断面图

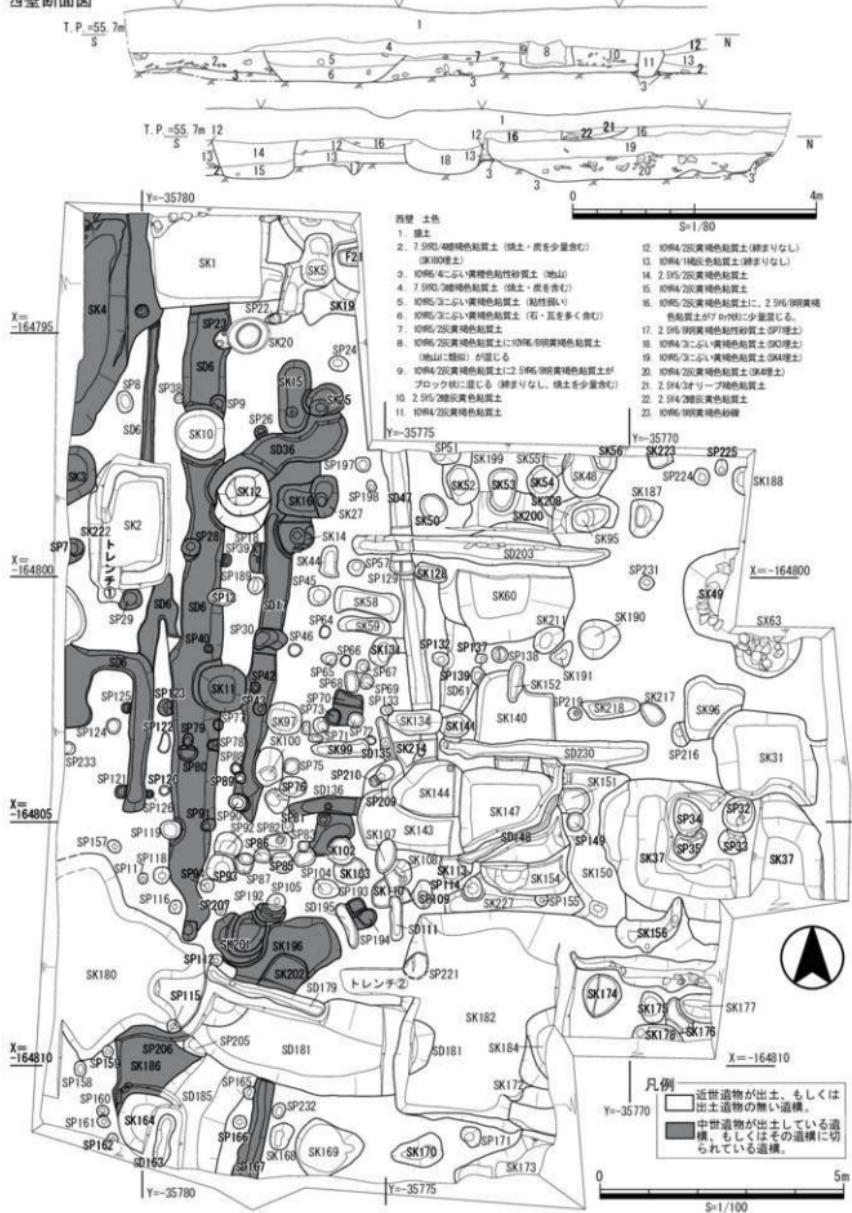


図3 全体平面図・西壁断面図

a. 中世

中世は南北方向の溝が掘られる時期の後、その溝の上から切り込む小穴や不定形土坑などで構成される。出土遺物の年代は偏りが見られ、12世紀代と15世紀代に集中する。ただし、遺物の年代が混在する遺構が多く、12世紀代の遺物のみ出土した遺構はSK3やSD6（図5-1・2・5）と少ない。15世紀代の遺物が多く出土した遺構には大型土坑のSK4が挙げられる。

SK4 調査区北西隅で検出した土坑SK4は西壁12層上面から切り込む、検出長4.6m、検出幅1.6m、深さ0.7mである（写真2）。埋土は2層に分かれ（図3-19・20層）、下層から多量の瓦などが出土した（図5-11・12）。規模や堆積状況から長期間開口しておらず、土採り穴の可能性がある。瓦葺建物の跡はなく、近隣の建物に由来すると考えられる。出土遺物の年代から15世紀前半～中頃に廃棄されたとみられる。

b. 近世

近世の遺構密度は北西部で希薄となるが、大部分は大型土坑（SK37・60・182など）が占める。大型土坑の深度は地山まで達し、土採り穴の可能性が高い。近世瓦（棟瓦含む）を含む出土遺物による埋没時期は19世紀前半～幕末である（図4）。遺物は近世初頭から幕末まで出土しているが、大型土坑掘削時に下層遺構を擾乱したためか、同一遺構内で時代が混在して出土している場合が多い。特に17世紀代の遺物は一定量認められるものの、17世紀代の遺物だけ出土した遺構は石積み遺構SX49（図5-7・8）のみである。

近世の正受寺の門が今と変わらない位置にあり（図2）、門のほぼ正面に本堂があったと考えると、本堂は現位置と概ね変わらない。その本堂であった所の下に大型土坑を多数掘削しているのは、現本堂の位置が空き地となった時期があることを示唆する。この大型土坑出土遺物には18世紀中～幕末と出土遺物に年代幅がある。これは共伴の瓦にも言え、本瓦葺と棟瓦葺の瓦が混在して出土している。これらの大型土坑は先のSK4と同様に長期間開口しておらず、土採り穴である可能性が高い。大型土坑のうち唯一異なるのは土坑SK2で、焼土・焼土壁・炭化物が16世紀末～17世紀初頭の遺物と共に大量に出土した。焼土壁の存在から建物火災が想定されるが、焼土面の広がりなどは確認できなかった。

2) 遺物（図5）

出土遺物は土器師皿（2）、瓦器碗（5）、瓦質土器擂鉢（11）、中国製白磁碗（1）、中国製青花皿（3）、中国製具須赤絵花鳥文皿（6）、瀬戸美濃焼天目碗（4）、肥前陶器砂目積灰釉皿（7）、肥前磁器染付碗（8）

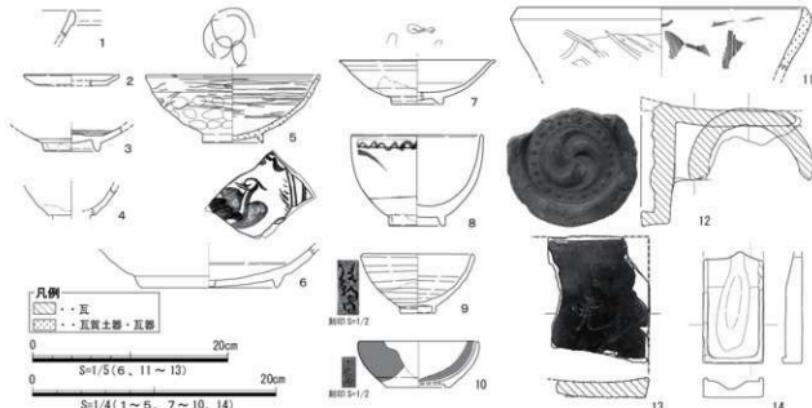


図5 出土遺物

SK4(11・12)、SD6(1・2・5)、SK3(3・4)、SK182(13)、SX49(7・8)、SK182上層(9・10)、SD181(6)、SK182(14)

(8)、京焼灰釉碗 (9)、関西系陶器掛分鉢 (10)、軒丸瓦 (12)、平瓦 (13)、石製硯 (14) を図化した。中国製具須赤絵花鳥文皿 (6) は漳州窯産である。京焼灰釉碗 (9) は外面高台際に「後朝日」の印が押される。「後朝日」とは再興朝日焼の事であると考えられるが、同一の刻印は確認できていない。刻印の書体の類似点などから、朝日焼を再興した8代の頃のもので、現段階では江戸時代に収まると考えたい^{注2)}。関西系陶器掛分鉢 (10) は桃形鉢になると見られ、胎土は鉄分を多く含んだ赤茶色である。外面底部際に「末廣山」の小判印が押され、類品から新宮焼とみられる。平瓦 (13) は凹面にヘラ描きで「寛」の文字が記されており、元号を表現しているのであれば遺構の年代から、可能性としては「寛政、寛延、寛保」が挙げられる。石製硯 (14) は流紋岩質凝灰岩製で伊予の虎間硯である。

4まとめ

今回の調査では須恵器が極少量出土したが、古墳時代や奈良時代の遺構ではなく、時代的まとまりを見せるのは12世紀からである。その後少し空けて15世紀代としてはSK4出土の大量の瓦があり、近辺に瓦葺建物があったことを示唆する。その瓦には古代瓦も含まれ、周辺の古代寺院との関連性も考えていく必要がある。

正受寺については礎石など建物に直接関係する遺構はほとんど確認できなかった。しかし、文献による創建時期である18世紀中頃の瓦は19世紀の瓦と共に多く出土しており、文献を後押しできるものと考えられる。ただ、繰り返しとなるが大型土坑は調査地の広範囲で検出され、本堂の位置が現在と似通った位置に建っていた場合本堂の範囲と重なった位置で掘削することになる。その場合、本堂があつては掘削できないことから、創建から100年ほどで本堂が無い状態があった可能性がある。一方で、文献に記された明治の台風による本堂倒壊とでは出土遺物の年代が合わず、創建時の本堂の位置などを再検討の余地が残る。

このように、遺構も遺物も多く見つかった調査ではあったが、解決できない問題も多く残った。今後、新たな文書資料がみつかれば、もう一度今回の資料と突き合わせて考える必要がある。

最後に、本調査についてご協力いただきました正受寺の皆様をはじめ、関係者の方々には記して感謝申し上げます。

注1)『郷土史の研究』南河内東部教育会編 大正15(1926)年 他より

注2)「後朝日・「末廣山」銘については、朝日焼十六世 松林豊章氏、大手前大学教授 岡佳子氏、京都女子大学准教授 前崎信也氏にご教授を得た。記して感謝申し上げます。



写真1 完掘状況（北より）



写真2 SK4断面・西壁断面（北東より）

報告書抄録

ふりがな	なかのきたいせき	シリーズ名	富田林市文化財調査報告				
書名	中野北遺跡 I	シリーズ番号	60				
編集機関	富田林市教育委員会	編著者名	角南辰馬、渡邊晴香				
所在地	〒584-8511 大阪府富田林市常盤町1番1号	Tel	0721-25-1000 (代)				
発行年月日	2017(平成29)年11月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積	
なかのきたいせき 中野北遺跡	とんだばやしし 富田林市 なかのちよご二ノうち 中野町二丁目	27214	15	34° 30° 50"	135° 36° 37"	2014.6.16 ~ 2014.7.31	248m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
中野北遺跡	集落跡	中世 ~近世	瓦溜・溝・土坑 ・石組遺構	瓦・土師器 ・瓦器・陶磁器	中世瓦が大廳に出土し、文献では確認されていない寺院が近辺に建っていた可能性が高まった。		